



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.220
2022.1.1
謹賀新年

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

加曾利B式土器

— 山内清男生誕120周年に向けて —

鈴木 正博

● 第43回 ● 山内清男と大正13年の小川貝塚

『画龍点睛』(1996)等伝記情報の山内清男は、早稲田中学時代から先史考古学に関心を示し、鳥居龍蔵の勧めにより1919(大正8)年に東京帝国大学理学部人類学科選科に入学、人類学教室の活動に積極的に参画しつつ遺伝学の道を志す。選科時代は内外を問わず学問の最新動向への注視を怠らず、専門とする人類遺伝学の習得に加え、先史考古学は改革期に突入する。

坪井正五郎の「コロボックル考古学」は貝塚や包含層を人類活動の痕跡として調査・分析、遺物形態学に機能論を加味し風俗に接近するが、没後は長谷部言人が継承・実践し、更に国府遺蹟英国流発掘に参加以来の方形区層位発掘の実践、及び層位間に観る「形式変化」の導出、並びに抜歯風習等を含む解剖学的研究を通して「コロボックル考古学」の高度化を企図する。松本彦七郎は長谷部言人から指導を受けるも、自身が述べるように発掘から「土器紋様論」に至る迄「古生物学的地質学的」接近法を旨とし、「コロボックル考古学」が標榜する土器にヒトを観る人類学的考古学とは立ち位置が大きく異なる。坪井正五郎に見出され「コロボックル考古学」の造詣に預かる鳥居龍蔵は、新たに隣接大陸の民族学研究から「土器型式部族説」(「同時代異部族説」)の構想に至り、列島の土器群は「地理上の系列」(山内清男の表現)により「厚手派」「薄手派」「出奥派」等幾つかの部族から構成されると論じ、松本彦七郎の論文を「土器時代論」として批判する。

こうした改革期に深く身を置く山内清男(明治35(1902)年生誕)は先史考古学への転向を余儀なくされ、昭和5年までに独創的な論文を陸続と発表し、全てに学史淘汰の勢いが示されるが、以後も論文の対象は長谷部言人の抜歯風習等学史の全方位へと展開する(鈴木正博(1995)『縄紋学再生』『古代探叢Ⅳ』)。

専門とする遺伝学関係では鳥居龍蔵から人類学データについて科学的精度を教授され、大正12年に遺伝形質と両親の地方差の関係等各

種系統分析を報告し(「諏訪郡住民の人類学Ⅰ」『信濃教育』第440号:佐藤達夫不問)、考古学では発掘データの科学的観察により婉曲的に鳥居龍蔵説を否定する(大正13年後述)。松本彦七郎の地質層位的年代細別は科学的方針として確認する一方、実査の機会(大正13)を経た上で「土器紋様論」の内容には違和感を察知し、小川貝塚の地点別考古層位により新たな年代細別と変遷を進める。土器音痴とのすれ違いに辟易としていた長谷部言人は山内清男の能力を知るや貝塚調査への専従を無理強いするも、山内清男は地点別方形区層位別に装飾と形態の実態分析から「土器型式」の制定に成功し、例えば所謂「亀ヶ岡式」では長谷部言人や松本彦七郎の概念的解説を棄却し、新たに地点別方形区層位別「土器型式」と装飾による「系統的発達」を導出する等本邦初となる編年学の基盤を確立する。

網羅的体系的な坪井正五郎の業績は流石に手強く、「人類学雑誌」は、日本に於ける先史考古学発達史そのものの観がある。(大正13年)との賛辞に始まり、晩年の「明治考古学秘史」では懐の深い「コロボックル考古学」の学史習得を勸奨、遂には研究の方針さえも「コロボックル考古学」に準じる変更を余儀なくされる(山内清男の学問体系は鈴木正博(1995)前掲論文参照)。

閑話休題。

大正13年3・4月、山内清男は加曾利貝塚調査に参画し、地点別方形区層位別発掘により加曾利B式と加曾利E式の年代細別、及び層位別による夫々の新古も確認する。同年5月の福島県小川貝塚等発掘は加曾利B式期を始めとする層位別資料にも恵まれ、帰途の仙台行にて松本彦七郎資料を検分し、6月に小川貝塚等概要報告後、早速9月にも小川貝塚を再発掘する。

小川貝塚の発掘は貝塚系列に於ける関東(加曾利貝塚)と東北との関係に目的を置くが、鳥居龍蔵説の検証も関わる。直後の再発掘は松本彦七郎資料を契機とする層位別資料の獲得・確

認が目的である。それらの経緯は山内清男の小川貝塚に関する次の4報文、即ち5月調査で鳥居龍蔵批判となる第1報:「磐城國新地村小川貝塚発掘略記(小川貝塚-三貫地貝塚-堅穴群)」『人類学雑誌』第39巻第4・5・6号(大正13年)、9月調査も含めての第2報:「福島県小川貝塚調査報告」(大正13年福島県提出、昭和44年後掲書)、「土器型式」命名版の第3報:「小川貝塚」『福島県史』第6巻(昭和39年)、「土器型式」の晩年振り返りとなる第4報:「小川貝塚の土器型式」他『山内清男・先史考古学論文集・旧第11集』(昭和44年)、に吐露される。

第1報は加曾利貝塚と同じ八幡一郎との発掘方法が丁寧に紹介される。貝塚の中心を「第一区」とし「二米四方」の方形区を層位別発掘し、西に「第二区」、南に「第三区」を地点別発掘区と設定し、夫々に貝層と貝層下の黒土層を分別し、多種多様多量の遺物出土を驚異的に報じる。白眉は遺物から「遺跡の性質を極め得るのみならず、遺跡の類縁について」も認め得るとの展望であり、「単なる地理上の系列をすてて、相互類縁に表れた遺跡系列のネットワークに織り込まれる」べきとの断言は、鳥居龍蔵の「土器型式部族説」批判原理そのものである。同じ年の第2報は「貝層、土層の積成順序」の構造的分析から地点別発掘区層位の統合化を目指し、敗戦後の第3報になり、「二区土層式」(「加曾利B2式並行」)、「二区貝層式」(「加曾利B3式曾谷式並行で、瘤付土器の発達の初期」)、「三区貝層式」(「瘤付土器の盛花期」)、「第一区貝層式」(「晩期大洞B式の時期」)との編年が紹介される。注目すべき最終の第4報では「三区貝層式」の「次にも一つの階段があるが、この遺跡には出てこない。」と緊急再発掘の意義と成果を示し、松本彦七郎の「里浜第18貝層式」(第42図)が「三区貝層式」と「第一区貝層式」の中間に編年される。こうして山内清男の縄紋式後期末葉土器群に正鵠を射るのは寺脇貝塚の「刻文土器」となる(本連載第37回参照)。

*巻頭連載は隔月です。今回は大村裕さんです。

目次

■加曾利B式土器 山内清男と大正13年の小川貝塚(第43回) 鈴木正博 …1
■考古学の履歴書 ことのはじまり(第36回) 間壁忠彦・間壁霞子 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイパレット・サイト(第213回) 原田健司 …3
■考古学者の書棚「紺青の鈴」 大谷 基 …4

考古学の履歴書

ことのはじまりー「亡」それでは 何だ (第36回) 間壁 忠彦・間壁 葎子

7. 吉備真備の母「楊貴氏墓誌」の謎(5)

前回でこの項目は終わる予定が、中国で思いもかけない、吉備真備が原文を朱書した可能性のある墓誌発見の報だった。一応当時の数社新聞紙上発表の要約は、次のようなものであった。特に後に記す「亡」字対象の拓本図は、毎日新聞2019年12月22日朝刊【北京共同】によるもので、明治大学東アジア石刻文物研究所の所長毛賀沢安規氏が、4年も前から交流研究を続けた成果とされ、以下の説明も同氏のコメントによるものが中心である。

墓誌の保管所は中国の広東省にある民間の「深圳望野博物館」、2013年入手、一般公開されているとのこと。墓誌本体は、約35cm四方 厚さ約9cmの石材、328文字が楷書で19行に刻まれている。唐時代の外国使節接待に関係した中級官僚「李訓」の墓誌で、彼は開元22(734)6月20日死去25日に洛陽郊外に埋葬とあり、末尾に「秘書丞褚思光文」と「日本国朝臣備書とあった。墓誌本体の文字は、真備が書いた可能性が高い」とされる。

毎日新聞に掲載された拓本は「日本国朝臣備書」とその前の6行ばかりが入った一角のみだったが、その中に「楊貴氏墓誌」で問題にした「亡」字もあった。私のわずかな知識で問題とした「亡」字例と共に、他の同字部分も比較して、皆さんにも見ていただきたいと思ったのである。



日本				中国					西暦	亡字
平城京時代				以前	唐					
	750	739	739		668	743	705	688	665	
亡	亡	亡	亡	亡	亡	亡	亡	亡	亡	亡
木	木	紙	紙	磚	木板	銅板	石	石?	石	石
墨書	墨書	墨書	墨書	刻	墨書	刻	刻	刻	刻	刻
平「逃亡」	平亡賜而	正亡者……	正備中死亡	楊貴氏墓誌	明日香石神	船王後墓誌	隆蘭法師碑	卜元簡墓誌	王伏生墓誌	九品亡官墓
11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1

▲上段 拓本 左が真備母とされる「楊貴氏墓誌」部分
右が中国「李訓墓誌」部分に「楊貴氏墓誌」の同字部分添付
下段 図表 7~8世紀頃中国と日本での「亡」字形対比表

左図の上段、拓本右図の中國例は、新聞紙上に示された拓本コピーの、最後2行分である。ここに真備の署名とされる文字と、「亡」があったので、そのコピーの横に、楊貴氏墓誌拓本コピーの中で、同字と思われる文字を切り取って貼り付けた。左図の楊貴氏墓誌の拓本コピーは、近江氏論文中の中で最良とされていた拓のコピーである。共に印刷物からのコピーとはいえ、中国は石刻であり、日本例は粘土板上であり、保存や刻字法の違いも考えねばなるまい。

下図の図表は前に記した『奈良時代・吉備中之國の母夫人と富ひめ』の中で使用した「亡」字に関する図表を簡略にしたもの。使用文献や個別説明はスペースの関係で割愛。ただ図中で「正」としたものは、正倉院文書で、「平」は平城宮木簡報告書などが多い。中国のものは書道全集など参照。詳しくは先の本を参照頂ければ幸いである。

この図表で示したかったのは、楊貴氏墓誌に近い時期で、我国と中国で使用した「亡」字形である。実は楊貴氏墓誌中の「亡」はこの字だけを見せられると、即座には読めない字であった。前後を見れば普通に理解できるだろうが、そのため印象に残っていた時、図中2番の中國墓誌上の文字と同形なのに気づき、その類似が気になり、身近な資料のみではあったが集めたのが、この図表の資料ある。

これで見ると、我国の「亡」字は変化が大きく、書いた人による違いのようで、それは習った所や手本の違いでもあろう。楊貴氏墓誌字が、全く同年の正倉院文書である「備中国大税負死亡人帳」と大変類似していることは注目したい。

こんかい話題となった中国での真備の書との対比は、表示の通りであり、素人目にはここに示した4文字互いに大変似て見える。しかし両資料とも、どちらかが真備の書いたものと認められてないのが、現状……私は両者とも真備の書としたいのだが……今後の研究成果に期待したい。

あまりにも吉備真備関係が長くなってしまった。この【それではなんだ】の話題では、すでに他界しているが、忠彦は備前焼にも、強く心を残していたが、奈良三彩葉壺形壺も、残した問題だった。次回からはその三彩壺に触れたい。

間壁忠彦 略歴	
1932~2017年	岡山県児島郡甲浦村(現岡山市南区)郡に生まれる
1951年	岡山県立操山高等学校卒業
1955年	岡山大学法文学部法学科卒業
1954~1973年	(財)倉敷考古館学芸員
1973~2006年	同上館長
1968~1998年	広島大学、1968~1980岡山大学非常勤講師(博物館学)、他に熊本・九州・愛媛・鳥取・千葉大学へ博物館学非常勤講師出講
1982~2005年	就実女子大学非常勤講師(考古学)、ほかに島根大学へ考古学非常勤講師出講
2006~2015年	(財)倉敷考古館学術顧問
間壁葎子 略歴	
1932年	岡山市門田屋敷(現岡山市中区)に生まれる
1951年	岡山県立操山高等学校卒業
1955年	岡山大学法文学部史学科(日本史専攻)卒業
1955年	岡山大学法文学部副手(池田家文書整理)
1956~2015年	(財)倉敷考古館学芸員
1979~1986年	中国短期大学非常勤講師(歴史学)
1985~2004年	神戸女子大学非常勤講師1年を経て助教授(1991年まで)教授(2004年まで)、以後同大学名誉教授
1995年	明治大学で論文博士(歴史学)

隔月連載です。次回は山本暉久先生です。

リレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 213

エリ穴遺跡 ～長野県松本市

原田 健司

私が紹介するのは、長野県松本市の南東部、鉢伏山麓に所在するエリ穴遺跡です。エリ穴遺跡は、縄文時代中期中葉から晩期後葉にわたって断続的に営まれた拠点的な集落で、全国最多の出土量を誇る土製耳飾りをはじめとし、大量の遺物が出土しています。出土品は、縄文時代後～晩期の甲信地域文化が日本列島の様々な地域文化との交流持っていたことを示す貴重な資料であることがわかりました。



▲エリ穴遺跡の遠景

筑摩山地の一角を占める鉢伏山の西麓の扇状地は、西流する多数の小河川によって形成され、その水を全て集めた田川が扇状地末端を北流します。エリ穴遺跡は、田川支流の舟沢川と塩沢川が形成した扇状地の扇央に位置し、標高は685m前後を測ります。遺跡範囲は、国の重要文化財である馬場家住宅周辺宅地や畑地、その西側の畑地に、東西約400mと南北約200mに広がります。

エリ穴遺跡が位置する田川流域は、農業地帯で昭和40年代後半からほ場整備事業が広範囲に行われ、数多くの遺跡が発掘されています。田川流域では、縄文早期の押型土器の時期から前期にかけて集落が形成されますが、中期前半まで継続する例が確認できません。一帯は、中期に入ると、集落が増加し、規模も大きくなります。中期末期から後期初頭にかけて、集落が激減し、エリ穴遺跡でも土坑2基とひとまとまりの遺物が確認できるだけで遺跡の継続性が辛うじて保たれていました。後期前葉の遺跡は後期中葉には継続せず、以後、晩期後葉までの間は、田川流域ではエリ穴遺跡しか存在しなくなります。

エリ穴集落の特徴の一つが廃棄儀礼と言えます。本来の機能を失った器物を地中に埋納する行為です。後期後葉までは、居住域内に掘られた土坑に埋納されており、その一番の例が人面付土版埋納土坑です。後期後葉以降になると集落の北部に、谷状の地形を利用した規模の大きい廃棄場が設けられるようになり、エリ穴集



▲長野県宝指定遺物の一部

落の独自性が見えてきます。廃棄場は晩期後葉まで継続的に使用されました。廃棄された遺物のうち土製耳飾りの出土量は全国最多の2,600点以上と特筆されます。後期末葉から晩期前葉の甲信地域では、大半の遺跡から土製耳飾りが発見されますが、エリ穴遺跡ではその量が飛びぬけています。その理由として考えられるのが、広域的儀礼の存在です。西関東系の耳飾りが一定量出土していることなどもあり、広域から集まった外来者の着装品である耳飾りが、祭祀後に廃棄された可能性があります。そして、谷状地形の大規模廃棄場の成立がこの広域的儀礼に関連していたと考えられます。

エリ穴遺跡での最初の発掘調査は昭和42年(1967年)に遡ります。当時、県下の縄文～弥生時代が専門の考古学者である藤沢宗平氏により、勤務校の松本深志高校地歴会の生徒達とともに合計3回、合わせて150㎡ほどの小規模発掘調査が行われました。

平成7年度には、ほ場整備事業に伴い、松本市教育委員会により遺跡の全域に近い範囲を発掘調査することができました。本来であればすぐに報告書にまとめなければなりませんでしたが、出土遺物は整理用コンテナ400箱以上に達したため、整理作業にかかる費用、作業スペース、人員確保ができずに、平成8年度に概要報告書をとりあえず刊行するしかありませんでした。

それから十数年経ち、作業スペースや人員確保に一定の目途がつき、平成25年度から遺物整理・報告書刊行事業を開始し、平成26年度から国庫補助事業として実施し、平成30年度までに4分冊、全1,200頁以上の報告書として刊行に至りました。平成31年1月には484点の出土遺物が松本市重要文化財に、令和2年3月には1点追加され長野県宝に順調に指定されました。さらに、令和元年度の『発掘された日本列2019』での展示が叶い、全国の方々に見もらうことができました。

私がエリ穴遺跡の出土遺物に関わったのは平成24年度からで、担当していたのが石器・石製品の整理です。剥片も含めれば約9万点の石器・石製品が出土しており、観察表の作成が完了するのに5年も要しました。

石器編が収まる第4分冊の刊行年度は、私にとって良くも悪くも思い出に残るものになりました。その年度初めから2月初旬まで発掘調査現場に出ており、さらに別の報告書の編集に追われ、エリ穴遺跡に費やせる時間がかなり限られていたため、とてつもない焦りの中にいました。報告書が刊行された時は、達成感というよりは、自分の能力のなさに打ちひしがれる思いでした。報告書原稿のうち石器編以外の大半を大先輩である百瀬長秀氏によって、じっくり分析・検討された上にまとめられましたが、それと比べると自身のパートは見劣りでしかありません。報告書の「総括」の中に、石器を盛り込んだ更なる検討が必要と書かれています。これは、今回作成した基礎資料を基に、再分析・再検討し、世に再提示しなければならないという、百瀬氏から私への鞭と捉えることができます。これが完了するまでエリ穴遺跡の報告書は完了ではないと、自身の心に刻むとともに、報告書作成の責務の大きさを実感させられました。

参考文献：

松本市教育委員会 1997 『エリ穴遺跡 -掘り出された縄文後晩期のムラ-』 松本市文化財調査報告No.127

松本市教育委員会 2017～19 『エリ穴遺跡発掘調査報告書(第1～4分冊)』 松本市文化財調査報告No.228

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは高山いず美さんです。

考古学者の書棚

「紺青の鈴」

高橋治 著／角川文庫(1985)

大谷 基

大学で考古学を専攻するも、未だ龍にも青大将にもなりきれない筆者である。とはいえ、文化財に関わる業務に奉職して幾年月、心に留める書物、考古学につながる書物として、「文化財担当の本棚」としての記述していきたい。新年1月1日の発行にあたり、ほろ酔い気分で読んでいただければ幸いである。

『…お前は絵からロクロ、ロクロから土と、どんどん逆戻りしとるわけや。土の次はどこや。次は土を掘る鍬の研究か』

「紺青の鈴」は、九谷焼の窯元を舞台とし、そこにかかわる人間模様を描いた作品である。登場人物のひとりである浜木は唐津で上絵をのせようとし、破門になり、新たに入門してきた青年である。浜木の目指すものは文中では明確に描かれないが、その後、瀬戸へと旅立つ。上述の言葉は、窯元の十九蔵から浜木に語られたものである。

私の業務する管内には、国指定文化財12、県指定文化財14、市指定文化財94、国登録文化財29があり、その内容は史跡から名勝、天然記念物、建造物、絵画、考古資料、民俗資料、無形民俗文化財など多岐にわたる。さらには埋蔵文化財包蔵地744箇所、ほか地域の芸能・伝承、石碑などなど。これらの文化財を取り扱うにあたり(業務は担当制であり、全てを一人で担う訳ではなく、メインは埋蔵文化財ではあるものの)、まずそれらは何なのか、どのような価値があるのか、どのように扱っていくのかなどを考えると、十九蔵の言葉が頭に浮かぶ。正確な文意はともかく、突き詰めて考えを進めていくと、どこまでも深く広く、知らなくてはいけないことが多い。加えて何のために知るのか、自分はどのように関わっていくべきか…。文化財にかかる法令の順守や学問的価値の追求は普遍的なものとして、最終的な目標を問われれば、一つ一つ明確に答えることはまだできない。

浜木も瀬戸から越前へと旅立つ。その理由を問われて『そこをうまく説明できるくらいなら、僕もこんなに方々歩き廻らないんですけどね』と答えている(註1)。今、思い至るのは、文化財を構成する要素は重層的なものであり、最終的には人々にどう受け入れられてきたのか、どう受け入れられていくのかということである。工藝藍學舎を主催する笠原博司氏の「工藝は人間の生活様式全てにつながる」という言葉を借りれば、「文化財は人々の行動様式全てにつながる」ということか。また「紺青の鈴」では、十九蔵は、

『…人間が生きて死んで、最後に残るものは仕事だけや。ほかのことはなんも残らん。…よう出来てる、世の中というもんは』

と語る。それは一つの真理かも知れないが、あえて付け加えれば「仕事を受け継ぐ人」もまた残る、残していかなければならぬだろう。その意味では、「考古学京都学派 角田文衛編／雄山閣出版1994」で描かれる人間模様は紺青の鈴以上に考えさせられる1冊である。その文中にある『考古学者が研究するのはモノではなく、ヒトである』という格言を踏まえれば、ヒトは過去のヒト・社会だけではなく、未来のヒト・社会をも見通した研究であるべきだとも思う。ではどうするか…市政もとい市井にまみれ、考える日々である。とはいえ、突き詰めて、達観しすぎることもまた問題があるような…「名人伝」中島敦…楽しそうに勾玉作りを体験する子供たちの笑顔にポツと心に点る温かさ、文化財に携わる楽しさもまた忘れまい。最後に、近頃手にした書物をあげる。

【建築】「日本の住まい」中山章／建築資料研究社2009

古建築および庭園に携わった際に手にした1冊。図版多く、建物構造から間取りや建具、茶室、庭園にわたり解説した良書。『ものは変わりませんが、人間は変化していくものです。見るたびに新しい発見があり、より豊かなものが見てくるはずですよ』という言葉は良い。

【考古学】「仙台湾における先史狩猟文化」楠本政助

矢本町史第1巻先史別冊1973

町史別冊として刊行された書籍であり、地域史と思いきや、縄文時代の土器や石器などの製作実験・実習が充実した内容となっている。

「小さな石のものがたり」第26回特別展図録
かみつけの里博物館2017「モノから見たアイヌ文化史」関根達人
吉川弘文館2016

【地域史】「伊達の国の物語」菅野正道／プレスアート2021

【番外】「考古学研究者結婚様式論」佐原 真

考古学論集第3集 考古学を学ぶ会1990

註1) なお、浜木は十九蔵から「十、五蔵」という小点数のつく名前をもらう。